

# ピネル製緩和抑制帯 取扱説明書



株式会社ピネルジャパン  
PINEL JAPAN Inc.





# 目次

---

安全上のご注意	P 2～3
製品のお取り扱いについて	P 4～5
抑制の手順	
概要	P 6
各抑制に適した製品について	P 7
【緊急固定 1】手足・肩の 5 点抑制	P 8～9
【緊急固定 2】手足・肩・中央の 7 点抑制	P 10～11
【緩和抑制 1】体幹・手足の 5 点抑制	P 12～13
【緩和抑制 2】体幹の 1 点抑制	P 14
【抑制帯のベッドへの取付けについて】	P 15
製品ごとの使用方法	
【PINEL # 1  腹部用ベルト】	P 16～18
【PINEL # 1 1  股下ストラップ】	P 19
【PINEL # 2  延長ベルト】	P 20～21
【PINEL # 3  抜け出し防止ベルト】	P 21～22
【PINEL # 4  手部／脚部用ベルト】	P 23～24
【PINEL # 8  脚部／肩部調整ストラップ】	P 25
【PINEL # 1 C ストラップ】	P 26～27
【PINEL # 5  マグネットキー】	P 28
【PINEL # 6 A ボタン】	P 28
【PINEL # 6 B ピン】	P 29
【PINEL # 6 L ひも付きボタン・ピン】	P 29
【PINEL # 1 0 キャリングバッグ】【PINEL # 4 0  緊急用カッター】	P 30
こんなときは	P 31～32
よくあるご質問	P 33～35
腹部用ベルトのチェックリスト	P 36

## 安全上のご注意（ご使用前に必ずご覧下さい）

- 抑制帯の使用に当たっては精神保健指定医の診察、診断が必要となります。使用される際には理由、日時、状態等を診療録に記載し、理由を患者本人にも告げることが精神保健法で定められています。また本製品の使用説明の映像は、必ず全てのスタッフの方々にご覧頂き、全員が正しい使用方法を習得するようにして下さい。
- 抑制帯を使用されている患者について、常時、臨床的観察を行い、適切な医療及び保護を確保することが精神保健法で定められています。本製品は、できるだけ患者の不快感が軽減されるよう設計されていますが、そのため逆に安心感を招くことがあります。抑制帯が漫然と使用されることのないよう、頻繁に診察を行って下さい。
- 使用方法を誤ると、患者の生命に危険が及ぶ場合があります。また、人権の保護に常に配慮し、必要と思われる場合にのみ使用するようにして下さい。
- 個人での使用はできません。また、個人向けの販売も取り扱っておりません。
- ここに示した注意事項は、安全に関する重要な内容を記載しています。必ずお守り下さい。

 <b>警告</b>	死亡または重傷を負う可能性が想定される内容を示しています。
 <b>注意</b>	傷害を負う可能性および物的損害の発生が想定される内容を示しています。

### **警告**

- **事前の点検を使用毎に行ってください。**
  - ・ベルトや付属品が傷んだり不足していたりしないか、ご使用の度ごとに必ず点検して下さい。ベルトの破損、鳩目の脱落、マジックテープの接着力低下など、状態の良くないベルトの使用は、重大な事故につながる恐れがあります。
  - ・ボタンとピンの脱着に問題がないかどうか、また、ボタン自体に破損がないかどうかご使用の度に装着確認を行い、安全を確認して下さい。
- **患者の状態に応じた適切な抑制と、観察を行ってください。**
  - ・この緩和抑制帯は、ベルトの組み合わせにより、興奮状態が激しい患者から比較的落ち着いた状態の患者まで、様々な状態に合わせたレベルの抑制が可能です。例えば不穏状態の患者に腹部用ベルトだけの緩和抑制だけを行うなど、**誤ったレベルの抑制を行うと、重大な事故につながる恐れがあり大変危険です。**後述の使用方法をよくお読み頂き、適切なレベルの抑制を行ってください。
  - ・**長時間の抑制は、静脈血栓塞栓症を引き起こす恐れがあるため、ご注意ください。**弾性ストッキングやDダイマーを使用するなどして、抑制が長時間に及ばないよう、患者の容態の変化を常に観察して発症を予防するようにして下さい。
- **抑制帯を正しくご使用下さい。**
  - ・腹部用ベルトは、患者の体型に応じて適正なサイズをご使用のうえ、正しい位置にしっかりと装着して下さい。不必要な隙間があると、患者が抜け出そうとして、重大な事故につながる危険性があります。また、患者の胸の一番細いくびれの位置に巻くようにして下さい。
  - ・**腹部用ベルトだけを単体で使用しますと、ベルトの位置ずれによる胸部圧迫や抜け出し、旋回による胴体圧迫、ベッドからの転落などの重大な事故につながる可能性があります。**股下ストラップなど他のベルトを併せて使用すれば、重大な事故を防ぐだけでなく、患者の突然の急変に対応することができます。ベッドからの転落を防止するためには、ストラップを寝返り調整用として併用することをおすすめします。
- **医療用のベッド等でご使用ください。**
  - ・本製品は、医療用ベッドまたは医療用ストレッチャー、医療用車椅子への取付けを目的として製造されています。取付けの前に、ベルトを通すことができるフレームまたは底板の隙間があるかどうか、ご確認ください。



## 警告

### ■ ベッドへ正しく取り付けして下さい。

- ・不安定な落下防止用のベッドレールへの留めつけや、マットレスやベッドへの直接の巻きつけ等は、絶対に避けて下さい。
- ・ベッド下でストラップ同士をつなげて使用しますと、患者がベッドからずり落ちて胴体を圧迫する危険があるため、ストラップは必ずベッド本体へ取り付けして下さい。
- ・ベッド及びストレッチャーともに、必ずグラグラしない、固定された部分に取り付けて下さい。また、昇降機能付きのベッドを使用の場合は、マットレス下の底板にストラップを取り付けるなどし、サイドフレームなどの非可動部分を避けて取り付けして下さい。非可動部分にベルトを取り付けた状態で昇降させると、ストラップやピンが破損する恐れがあります。
- ・ベッドに腹部用ベルトを取り付ける際は、できるだけきつく締めて下さい。患者の腹部用ベルトは、ベッドに取り付けるベルトからは独立した構造になっています。そのため、ベッドへ取り付け部分のベルトは、どんなにきつく締めても患者にはまったく影響はありません。



## 注意

### ■ マグネットキーの取扱いにご注意下さい。

- ・ピネルのマグネットキーは、ペースメーカーやホルター心電図モニターなど、ほとんどの医療器具に影響を及ぼさないことが確認されていますが、磁石が使われている性質上、磁気化しやすいコンピューターディスクなどには近づけないよう、十分にご注意下さい。

### ■ 火気にご注意下さい。

- ・ベルト類は、切断されにくく防災効果のある素材が使われていますが、患者が、燃やしたり切ったりしようとしないうよう、十分にご注意下さい。

### ■ 製品の耐用年数をご確認下さい。

- ・4頁～5頁にありますベルトや付属品類の耐用年数をご確認いただき、また、耐用年数を経過する前でも必ずご使用ごとに点検を行って下さい。

### ■ 塩素系薬剤での消毒、及び塩素系の洗剤や漂白剤は使用しないで下さい。

- ・塩素系の洗剤はベルト生地を傷める恐れがあるため、使用しないで下さい。
- ・塩素系薬剤での消毒は、金属部分の腐食やロックシステム誤作動の原因となりますため、使用しないで下さい。

※ステンレス一体型のピンのみ塩素系薬剤での消毒が可能です。

### ■ 使用中に異常がある場合はご使用を中止してください。

- ・ベルト類の生地素材は肌触りのよいマイクロファイバーですが、継続使用等により本来の柔らかさが低減いたします。装着による肌トラブルが見られる場合は、速やかにご使用を中止してください。褥瘡などの傷がある状態で使用されますと、感染症を引き起こすリスクがございますので、患者の皮膚に異常がみられる場合は、すみやかにご使用を中止してください。

### ■ ベルト類は4層まで重ね付けが可能です。5層以上を重ねないでください。

- ・5層以上を重ねた状態でロックしますと、ボタンとピンの脱着不良を起こす場合がありますので、ベルト類を重ねてロックする場合は4層までとして下さい。

# ピネル製品のお取扱いについて

## 【耐用年数について】

### ● ベルト、キャリングバッグは約5年

5年を経過していなくても、生地が収縮したり厚みがなくなる、芯地が露出している、端のほつれが酷いなどの状態はベルト本来の強度を保てなくなっている可能性があります。

### ● ボタンは使用開始時期より約2年

(製造時期ではなく、使用開始時期がめやすになります)。耐用年数を過ぎたボタンは、ボタン内部部品が劣化することで解除が困難になったり、逆に不用意に外れてしまう恐れがあります。また、耐用年数を過ぎる前でもボタン穴内部に汚物が付着した場合など、正常使用に支障をきたす恐れがある場合は、速やかにご使用を中止して下さい。

#### ※「製造時期」について

ボタン裏面に2つの丸印で刻印されています。右側の丸印は製造年の四半期でいつ製造されたかを示すQナンバー(Q1:1月から3月、Q2:4月から6月、Q3:7月から9月、Q4:10月から12月)、左側の丸印は製造年の下二桁を示しております。(例:18なら2018年)。刻印のないものは使用期限を超えておりますので、速やかに新品と交換して下さい。



(例)

②② → 2022年

Q1 → 1月から3月

### ● 2019年10月～現在取扱いのステンレス製ピンは、永久使用可能 2019年9月以前に取扱いのピンは、約5年

※2015年4月以前販売品は、底と軸をネジと強力接着剤にて接着する構造となっております(軸の底近くに継ぎ目があります)。製造元の強度テストおよび製品テスト上は、底と軸を人力で分離させることは不可能ですが、5年以上の長期ご使用や塩素系洗剤による洗浄などにより、人力で軸のネジ部分が緩む場合があります。



<ステンレス製ピン>  
光沢のない金属色で、軸部分の継ぎ目はありません。



<真鍮製ピン>  
光沢のある金属色で、軸部分の継ぎ目はありません。



<分離構造型ピン>  
軸の下部に継ぎ目があります。

● マグネットキーには特に耐用年数設定はありませんが、保護カバーや保護ツメが破損した場合などはご使用を中止して下さい。

※保護ツメは柔らかい素材でできており、人力で曲げることができます。これは、ツメが折れて断面や破片で怪我をすることを防止するためのものです。内側に曲がってしまった場合は、人力で外側へ戻すことができます。



● 上記以外にも不具合が発生した場合は、すみやかにご使用を中止して頂き、必要に応じて新品への交換購入をお願い申し上げます。

## 【使用上のご注意】

● ベルト類は4層まで重ね付けが可能です。5層以上を重ねて留め付けるとロックシステムの不具合を起こす可能性があります。

● 「ピネル製緩和抑制帯 取扱説明書」をよくお読みいただき、正しくご使用ください。

● 抑制帯生地は大変柔らかい素材で作られておりますが、皮膚の状態によっては、摩擦により皮膚を傷める恐れがあります。装着により褥瘡などの皮膚トラブル等、身体に異常が認められた場合は、すみやかにご使用を中止してください。

## 【修理について】

● ベルト生地の安全性に問題がなければ、#4(手部/脚部用ベルト)のマジックテープ(黒面・白面)の貼り替えや、脱落した鳩目の付替えなどの修理に対応いたします(有料)。詳しくは弊社よりご案内の別紙「修理依頼票」をご確認下さい。

● 同じ場所の再修理や、破損状況などによりましては、修理をお引き受けできかねる場合がございますので、何卒あしからずご了承下さい。

● 修理の御見積は無料となりますが、ご依頼品を送付される場合の送料はお客様負担となります(修理完了後の返送時の送料は、弊社規定に準じます)。

● 付属品類(ボタン・ピン・マグネットキー)および、緊急用カッターの修理はいたしかねます。

※ご購入より6か月以内の初期不良については、無償修理または新品にお取替えさせていただきますので、お手数をおかけしますが、弊社宛にご連絡ください。



株式会社ピネルジャパン  
PINEL JAPAN Inc.

## 【ベルトの洗濯方法】

● 通気性・抗菌性に優れた素材を用いて製造されておりますが、体液や汗・血液などが付着しますと、臭いや雑菌が繁殖する原因となりますので、定期的に洗濯して下さい。

● 洗濯する前に、全てのボタン、ピンを外して下さい。洗濯機をご使用になる際は、ベルト類を袋状のネットに入れますと、バックルなどの金属部分が洗濯槽を傷つける心配がありません。不要な靴下などを金属部分に被せておく方法もあります。

● 95度以下の水温にて洗濯して下さい。

● 一般的な市販の洗濯用洗剤をご使用いただけます（洗剤のご使用方法は各メーカーの使用方法をご確認下さい）。

● #4（手部/脚部用ベルト）を洗濯する場合は、付属の「洗濯カバー」を黒いマジックテープ面に貼り付けてから洗濯して下さい。糸くずの付着などを防ぎ、マジックテープ面の接着力低下やベルト生地 of 毛羽立ちを防ぐ効果があります（カバーは別売り可）。



## 【ベルトの乾燥方法】

● 通気性に優れているため、風通しのいい日陰に干しておけば、1時間弱ほどで乾きます。

● 乾燥機をご使用の場合は、80度以下の低温サイクルでの乾燥温度にてご使用下さい。お使いの乾燥機の取扱い方法に従い、適切にご使用ください。

**乾燥機に製品を詰め込みすぎたり、機内が高温になりますと、製品ラベルが熱により変質する恐れがございますので、ご注意ください。**

● 乾燥後も臭いが気になる場合は、必要に応じて市販の消臭スプレーなどを使用することも可能です。

● アイロンのご使用は生地を傷める原因となりますので、おやめください。

## 【製品全般の消毒方法】

● 消毒が必要な場合は、酸素系漂白剤またはアルコール製剤をご使用下さい。**塩素系漂白剤は生地や金属を傷める原因となりますので、ご遠慮下さい。**（洗剤のご使用方法は各メーカーの使用方法をご確認下さい）。

● 酸素系漂白剤を使用されますと鳩目のコーティング部分が剥がれて、アンティーク色から銀色に変色する場合がございますが、ご使用に問題はございません。

● 製品全般はオートクレーブ滅菌が可能ですが、抗菌性能を保ち、生地の縮みを避けるために、120℃以下で使用されることをお勧めします。

● #6A（ボタン）を消毒する場合は、アルコール製剤を含ませた布で拭き取り消毒を行ってください。または、ボタン穴を指で塞ぐなどして薬剤が入り込まないようにした状態で、アルコール製剤に1分ほど漬けてください。

● ボタンや分離構造型ピン、真鍮製ピン（2019年9月以前取扱い品）に塩素系薬剤を使用しますと、金属損傷や、ボタンの蓋部分に使用している接着剤剥がれが起こる可能性があります。ボタンやピンが正常に作動しなくなる恐れがありますので、ご注意下さい。

## 【保管と日常的なお手入れの方法】

● 洗濯した製品は十分乾燥させたらえ、#10（キャリングバッグ）をお持ちであれば、バッグ内に保管することをおすすめします（ベルトごとに分類しやすいように、内部に仕切り板があります）。

● 直射日光が当たる場所や高温高温の場所を避け、定期的に陰干しを行うなどして、製品の劣化を防ぐようお願いいたします。

● #4（手部/脚部用ベルト）には、マジックテープの接着力を保つため、付属の「洗濯カバー」を黒いマジックテープ面に貼り付けて保管して下さい。黒いマジックテープ面に髪の毛や糸くずなどが付着した場合は、つまようじ等を使って掻き出して除去してください（目めきなどの先の尖った道具でも代用できますが、取扱いには十分ご注意ください）。表面に浮いたほこりなどは、ガムテープなどに吸着させて除去することができます。

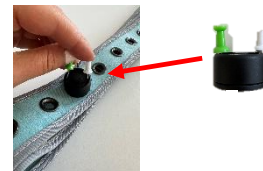
## 【ロックシステムの解除方法】※現行ボタンのみ

ロックしたボタンとピンが外れなくなった場合は、以下の順に解除を試してみてください。

①留め付けた場所のベルト類を指で挟んで、ベルトにかかる圧力を取り除いた状態で、ボタンにかぶせたマグネットキーを素早く上下させる。

②ボタンを水平に回してから①を同様に行う。

③ボタンの上部にある2つの小さな穴に画びょう等を同時に押し込んで内部のディスクを下げる（この場合ボタンを強制破損させるため、再使用は不可となります）。



## 【製品の取扱い表示の説明】



液温は95℃を限度、洗濯・脱水は普通



塩素系漂白禁止



アイロン禁止



ドライクリーニング全ての溶剤で可



欧州の燃焼試験基準に合格



オートクレーブ処理120℃まで可



株式会社ピネルジャパン  
PINEL JAPAN Inc.

# 抑制の手順

## 【抑制レベルの概要】

次ページより、抑制のレベル（強弱）に応じた抑制方法の手順を説明します。



**ご注意ください**

**患者の状態に応じた適切な抑制と、抑制中の頻回観察を行ってください。**

- ・この緩和抑制帯は、ベルトの組み合わせにより、興奮状態が激しい患者から比較的落ち着いた状態の患者まで、様々な状態に合わせたレベルの抑制が可能です。例えば不穏状態の患者に腹部用ベルトだけの緩和抑制だけを行うなど、**誤ったレベルの抑制を行うと、重大な事故につながる恐れがあり大変危険です。**下記以降の使用方法をよくお読み頂き、適切なレベルの抑制を行ってください。
- ・**長時間の抑制は、静脈血栓塞栓症を引き起こす恐れがあるため、ご注意ください。**弾性ストッキングやDダイマーを使用するなどして、抑制が長時間に及ばないように、患者の容態の変化を常に観察して発症を予防するようにして下さい。

※ 抑制レベルの強さを★で表しています。患者の抑制帯を装着したままで、矢印の先の抑制に移ることが可能です。

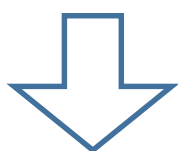
【緊急固定1】 手足・肩の5点抑制  
抑制レベル ★★★☆☆

➡ P8~9



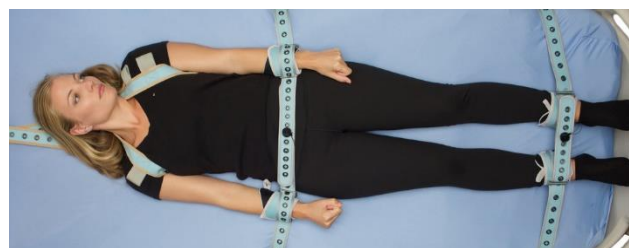
【緩和抑制1】 手足・体幹の5点抑制  
抑制レベル ★★☆☆☆

➡ P12~13



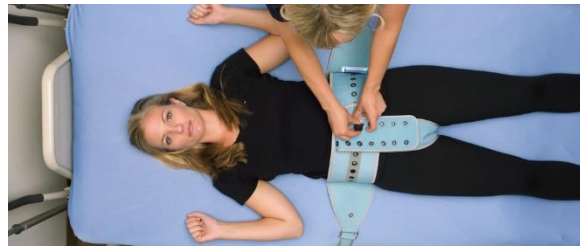
【緊急固定2】 手足・肩・中央の7点抑制  
抑制レベル ★★★★★  
★★★★★

➡ P10~11



【緩和抑制2】 体幹の1点抑制  
抑制レベル ★☆☆☆☆

➡ P14





# 抑制の手順

## 【各抑制に適した製品について】

抑制の内容に応じた必要なアイテムの目安は、下記表をご参考に選択してください。  
 ※ボタン、ピン、ひも付きボタン・ピン、マグネットキーは適宜必要数をお使いください。

【図表示】 ◎：必ず必要    ○：必要（可能なら使用）    △：任意（必要に応じて）

目的	#1	#1C	#2	#3	#4	#8	#11	参照頁
緊急固定1					◎	△		P8～9
緊急固定2		△			◎	○		P10～11
緩和抑制1	◎				◎		○	P12～13
緩和抑制2	◎						○	P14
点滴固定					◎			P24
左右どちらかの片側に固定	◎	◎						P26
腹部用ベルトの腹囲延長	◎		◎				○	P20～21
腹部用ベルトの上方向へのすり抜け防止	◎						◎	P19
腹部用ベルトの下方向へのすり抜け防止	◎			◎				P21～22
寝返りを調整	◎	◎						P26
手の可動域を調整	◎				◎			P13
足の可動域を調整					◎	◎		P25
上半身の起き上がりを防止	◎			◎		◎		P22
車椅子使用時での装着	◎						◎	P27

※#11「股下ストラップ」は、腹部用ベルトを装着する際は、安全性を確保するためにできるだけ併用を心掛けてください。

## 抑制の手順

## 【緊急固定1】 手足・肩の5点抑制

抑制レベル ★★★☆☆



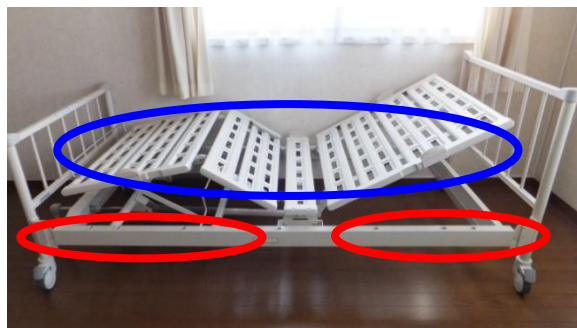
- ポイント
  - ・患者の手足をマジックテープですばやく固定すると同時に、肩も抑制する。
- 効果
  - ・興奮状態にある患者を短時間で抑制することで、緊急的に患者の身体の安全を確保する。
  - ・殴打、蹴りなどの危険な動作や、上半身を起こしての頭突きや噛みつきを回避する。
- 推奨状況
  - ・搬送された直後などすばやい抑制が必要な場合。
  - ・興奮度が高く、自傷危険があるなど切迫した状態。
  - ・腹部に傷があるなど、体幹部の抑制ができない場合。

## ① 事前準備

抑制する予定のベッド（またはストレッチャー）に、あらかじめ「手部／脚部用ベルト」を取り付けておく。（12ページ「抑制帯のベッドへの取付けについて」も参考にしてください）



背上げ・脚上げ機能つきベッドや、高さ調節付きのベッドの場合、非可動部分（赤い丸印）へのストラップの取付は、昇降時にストラップが無理な力で引っ張られてしまい、大変危険ですので、非可動部分を避けて取り付けてください。なお、底板（青い丸印）は可動部分となりますので、抑制帯をご使用中にベッドを昇降させることができます。また、ベッド下でベルト同士を直接つなげないで下さい。

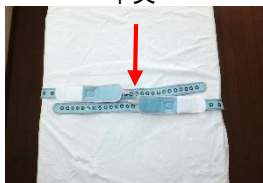


左図のように、底板にストラップを通す場合、鳩目と底板の断面が接触することで、鳩目の損傷を引き起こす可能性が高くなります。使用ごとになるべく違う場所の鳩目を使うか、鳩目が歪んだり生地から取れそうになっている場合は、使用を中止してください。



マジックテープの白面が上を向くように置きます。短い方のストラップはベッド中心方向へ、長い方のストラップはベッド外側方向へくるように配置します。上下位置は、仰向けに寝た患者の腕を自然にベッドに置いた状態での手首の位置、足首部分は足首がくる位置あたりにします。長い方のストラップをベッド本体に取り付けます。（手首と足首共通の取付け方法です）

中央



【手首位置の留め付けについて】  
片方の手を伸ばしたときにもう片方の手首バンドを開けられない程度に距離を離し、かつ、左右の短いストラップ同士が腹部の上を通して中央で結合できる距離を目安にして決めます。（図では、見やすいようにベルトの上下位置を若干ずらしています）

【足首位置の留め付けについて】  
左右の短いストラップ同士が中央で結合できる距離を目安にして決めます。足の開脚度が大きいと、患者が不安になる可能性があるため、足の開脚が適度に狭くなるように配慮しましょう。



すぐに患者を運び込まない場合は、患者に余計な不安を与えないよう、ベッドに留め付けた手部／脚部用ベルトはマットレスの下に折り込んで、できるだけ患者の目に触れないようにしましょう。

# 抑制の手順

## ② 患者の手足をマジックテープで固定する

患者をベッドに寝かせます。このとき、手の甲や足の甲にかからないようできるだけ手首や足首に近いところで固定することを心がけて下さい。マジックテープは、白面と黒面のループを使って少し斜めに重なり合うように留めつけます。緊急固定1では正確さよりも素早さを優先させるため、様々な角度から留め付ける練習をしておくことが大切です。

## ③ 患者の肩を脚部／肩部調整ストラップで固定する

患者の興奮度が高い場合、頭突きや噛みつきを防ぐために、前述の手足の抑制に加えて上半身の抑制を行います。



患者の手足を固定している間に、別のスタッフが脚部／肩部調整ストラップの中央部分を首筋の後ろ側から当てます。均等に中央位置にするには、黒／グレーのスロットを目安にします。脚部／肩部調整ストラップの裏表や、スロットの上下位置はどの向きでも構いません。



(図1)

(図2)

ストラップの両端を患者の両肩にかけ、両端を脇の下から引き出します(図1)。引き出したストラップは2本とも、患者の頭方向へ引っ張ります(図2)。

ストラップを引くことにより、かなり力の弱いスタッフでも腕力のある患者の肩をマットレスに押し付けることができます。この方法で一旦患者が仰向けになれば、強く引かなくても上体を押さえることが可能です。



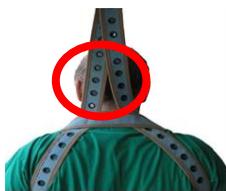
前述までの動作だけで肩部の安全固定は可能ですが、患者の首には脚部／肩部調整ストラップの中央部分が直接当たることで、首への負担がかかります(図3)。

余裕があれば、脚部／肩部調整ストラップの端を、中央部分の下から首後ろにくぐらせて、リュックを背負うような形にします(図4)。脇にのみ力がかかり患者の首への負担を和らげます。

安全固定する時は、脚部／肩部調整ストラップの両端をベッド枠の頭側にボタン・ピンで留めて下さい(図5)。ただし、この状態でベッドを昇降させないでください。



(図3)



(図4)



(図5)

## ④ マジックテープを正しく巻き直す(緊急固定2へ移行しない場合)



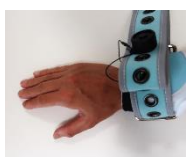
(図6)

手部／脚部用ベルトの下に挟まっている衣服の袖や装飾品などがあれば外して、まず手首を正しい位置に置き直します。目安としては、手の平の真下の手首皮線がマジックテープバンドの上端あたり、手の平側の手首がマジックテープバンドのバツ印状の縫い目に当たる位置が、正しい位置となります(図6)。



(図7)

マジックテープの白面と黒面を持ち、適切な角度と強さで巻きなおします。手首や足首の形状に合わせて均一に圧力がかかるような角度(手首・足首の細いところから太いところへの傾斜と同じ角度が最も好ましい)に巻きなおします(図7)。



(図8)

短い補助ストラップは、白面の付け根についているバックルに一旦通してから折り返し、マジックテープバンドの上に巻き付けてボタンとピンで留め付けます。圧迫されないように、強く巻き付けすぎないようにご注意ください。



締め方が強すぎるとうっ血や虚血による手の運動障害や神経症状を引き起こす恐れがあります。反対に弱すぎると手のすり抜けや摩擦による皮膚トラブルを引き起こす恐れがあります。

# 抑制の手順

## 【緊急固定2】 手足・肩・中央の7点抑制

抑制レベル ★★★★★☆



- ポイント
  - ・緊急固定をより強化して手足の可動域を狭める。

- 効果
  - ・緊急固定1よりもさらに固定を強化することが可能。
  - ・マジックテープを正しく巻き直すことで手足の不快感を軽減させる。
- 推奨状況
  - ・緊急固定1でもまだ危険な動作を制御しきれない場合。
  - ・興奮度が高く、自傷危険があるなど切迫した状態。

### ① マジックテープを巻き直す



(図1)

太い  
細い

手部／脚部用ベルトの下に挟まっている衣服の袖や装飾品などを外し、適切な角度と強さで巻きなおします。巻き直している間は、他のスタッフに腕を押さえてもらいます。足首も同様にしましょう。手首や足首の形状に合わせて均一に圧力がかかるような角度（手首・足首の細いところから太いところへの傾斜と同じ角度が最も好ましい）に巻きなおします（図1）。

#### CHECK! 【手首や足首の置き方】

- ・手首：手首の内側がバンド内側のXの縫い目に面するように置く（図2）。
- ・足首：アキレス腱側がバンド内側のXの縫い目に面するように置く（図3）。



(図2)



(図3)

### ② 手部／脚部用ベルトを手足それぞれの中央位置で固定



(図4)



(図5)



(図6)



(図7)

手部／脚部のマジックテープ部分の固定を短いストラップでさらに強化します。ストラップの固定強化方法は、手首も足首も同様です。まず短いストラップをマジックテープバンドの上に回し、金属バックルに通します（図4）。

そして患者の中央に向かって強く引きます（図5）。

患者の腰上を通り腹部の中央になる場所で、ひも付きボタンピンを使い、左右のストラップ同士を接続します。手首はできるだけ脇腹に近づけるようにします（図6）。

※腹部の中央で接続する際に長さが足りない場合は、短いストラップを金属バックルに通さずに直接つなぎ合わせても構いません。

短いストラップ同士を中央で接続することで、上体をくねらせたり跳ね上がったりを防ぎます。

接続したストラップにより窒息を起こさないよう、胸郭に向かって引っ張り上げないように気をつけて下さい。

両足も同様に短いストラップ同士を中央で接続します（図7）。

# 抑制の手順

【補足】 手足中央の固定を繋げて強化

抑制レベル ★★★★★



※【緊急固定2】に追加して強化したい場合。

- ポイント
  - ・【緊急固定2】の抑制レベルをさらに上げる。
- 効果
  - ・患者の膝の持ち上がりを抑制。
  - ・手首を頭方向へ持ち上げることを抑制。
- 推奨状況
  - ・【緊急固定2】を行っても、噛みつきや蹴り上げなどの動作が治まらず、興奮度が高い場合。

## ① 膝の持ち上がりを抑制するには



(図1)



(図2)

ストラップ（#1C）をベッド足元のフレームに固定します。ボタン・ピンで固定するか（図1）、または、ストラップをフレームに巻き付けてバックルに通します（図2）。



(図3)

足元に固定した反対側の先は、足を固定している手部／脚部用ベルトの中央部分につなげれば、膝の屈伸動作を抑えることができます（図3）。ただし、この状態でベッドを昇降させないでください。

## ② 手首を頭方向へ持ち上げることを抑制するには



手足に装着した手部／脚部用ベルトのそれぞれ中央部分を、ストラップ（#1C）でつなぐと、患者が手を口元に持っていきづらくなり、ベルトを歯でこじ開けようとする動きを防ぐことができます。つなげ方は、①と同様にボタン・ピンまたはバックルを使います。

# 抑制の手順

## 【緩和抑制 1】 手足・体幹の5点抑制

抑制レベル ★★☆☆☆



- ポイント
  - ・腹部用ベルトをメインに、手部／脚部用ベルトや股下ストラップを組み合わせて快適性を向上させながら、安全性を保つ。
- 効果
  - ・安定時には、手足の可動域が広がることで、快適性が向上する。
  - ・急変時には、手足の可動域を瞬時に狭めることが可能。
- 推奨状況
  - ・興奮度が継続しないまでも、不穏になる可能性があり得る場合（精神状態に波がある状況）。

### ① 脚部／肩部調整ストラップを外して、肩の抑制を解除。

緊急固定 1 または 2 で行った肩の抑制を解除します。これにより、手部／脚部用ベルトだけの状態になります。

### ② 腹部用ベルトをベッドに取り付ける。



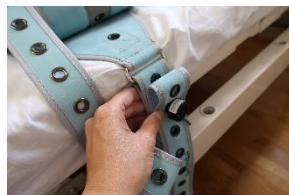
手部／脚部用ベルトを装着したままの状態、腹部用ベルトを患者の体の下に差し入れます。その場合、患者の上半身を起こしたり、腰を浮かせて、お尻の下から腹部用ベルトを通せるようにします。腹部用ベルトがベッドの中心に来るよう、体幹部左右のバックルを目安に左右位置を調整します。

**CHECK!** 腹部用ベルトを差し入れる場合、下記②④のどちらの方法でも構いません（P16～P18 「腹部用ベルト」も参照）

#### ② 体幹部に左右のストラップを接続して一体化させた状態で患者の腰の下に差し入れてから、左右のストラップをベッドに取り付ける方法



腹部用ベルト全体を差し入れます。



片側を固定したら、もう片側を強く引いて固定します。

#### ④ 左右のストラップだけを先にベッドに取り付けておき、次に体幹部を患者の腰の下に差し入れて、最後に左右のストラップを体幹部に接続する方法



ベッド側には、ストラップの先端を通します。



バックルにぶつかるまで手前に強く引いて固定します。



ストラップの左右を同様に固定したら、体幹部を差し入れます。



ストラップの先端を体幹部のバックルに通します。片側を固定したら強く引いて、もう片側を付けます。

### ③ 患者に腹部用ベルトを装着する。



(図1)



(図2)

患者の胴体の両側に広がっている腹部用ベルトを重ね合わせ（ポケットの付いている面を下にする）、中央の1箇所または2箇所ですり合わせます（図①）。2箇所ですり合わせると、固定がより安定します。股下ストラップを併用する場合は、腹部用ベルトの鳩目をひとつ分けて2箇所ですり合わせます。できるだけ股下ストラップが中央位置にくるように装着してください（図2）。

※腹部用ベルト、股下ストラップの詳細な装着手順は「製品ごとの使用方法」を参考にしてください。

# 抑制の手順

## ④ マジックテープを巻き直す。

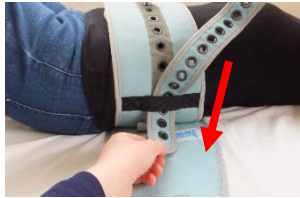


太い  
細い

手部/脚部用ベルトの下に挟まっている衣服の袖や装飾品などを外し、適切な角度と強さで巻きなおします。巻き直している間は、他のスタッフに腕を押さえてもらいます。足首も同様にしましょう。手首や足首の形状に合わせて均一に圧力がかかるような角度（手首・足首の細いところから太いところへの傾斜と同じ角度が最も好ましい）に巻きなおします。

【手首の置き方】手首：手首の内側がバンド内側のXの縫い目に面するように置く

## ⑤ 手部/脚部用ベルト（両手）のストラップを、腹部用ベルト脇のスロットに通して再固定する（手の可動域を調整する）。



(図3)

手部/脚部用ベルトの長いストラップを、フレームに留め付けてあるところから、一旦外します。外したストラップの先を腹部用ベルトの脇腹位置にある黒いスロット（またはバックル）に通したら、再度フレームに固定します（図3）。同様の手順を反対側の手首留め付け部分でも行います。

P11の緩和抑制2から始める場合は、ここで患者の手首や足首に手部/脚部用ベルト（両手と両足の4点）のマジックテープバンドを装着します。

※手部/脚部用ベルトの詳細な装着手順は「製品ごとの使用方法」を参考にしてください。



腹部用ベルト脇のスロットに一旦通すことで、患者が不穏状態になったときは、さっと手部/脚部用ベルトのストラップを引っ張れば、瞬時に可動域を狭くして抑制レベルを上げることができます（図5）。状態が安定していれば、ストラップを長めにしておき、手の自由度を上げることが可能です（図4）。



(図4)



(図5)

## ⑥ 手部/脚部用ベルト（両手、両足）の短いストラップをマジックテープバンドの上に巻く。



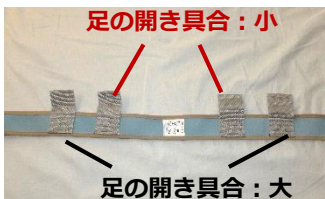
緊急固定2から移行する場合は、まず患者の腹上で繋げた手部/脚部用ベルトの固定を外します。外した短いストラップを、マジックテープバンドの上に巻き付けて固定します。

※詳細な装着手順は「製品の使い方」を参考にしてください。



補助ストラップによる巻き付けは、マジックテープが外れないようにするための補助的役割です。強く巻き付けすぎると、圧迫が強くなり血流を妨げる恐れがあります。

## ⑦ 脚部/肩部調整ストラップを使って足の可動域を調節する（必要に応じて）。



ベッドフレームに脚部/肩部調整ストラップを取り付けておきます。4つのスロットの向きは頭側でも足側でも構いません。裏表は、スロットの縫い目やタグ（図1のベルト中央にある白い部分）が見えるように置きます。患者の足首が当たる位置に左右対称と（図4）なるよう配置します。位置が決まったらボタン・ピンでベッドに固定します。



(図2)



(図3)

手部/脚部用ベルトの長い方のストラップをベッドから外してスロットにくぐらせます。足の開き具合を小さくするか大きくするかで、通すスロットを選びます（図1）。

スロットを一旦起こしてからストラップを通すと、2つのベルトが重なってフィットします（図2、図3）。

スロットに通したストラップは再度ベッドに固定します。



⑤の手順と同様に、足を脚部/肩部調整ストラップのスロットに一旦通すことで、患者が不穏状態になったときは、さっとストラップを引っ張れば、瞬時に可動域を狭くして抑制レベルを上げることができます（図5）。状態が安定していれば、ストラップを長めにしておき、足の自由度を上げることができます（図4）。



(図4)



(図5)



長時間の抑制や、同じ姿勢での固定など、肺塞栓症を引き起こさないように十分にご注意ください。

## 抑制の手順

## 【緩和抑制 2】 体幹の1点抑制

抑制レベル ★☆☆☆☆



- ポイント
  - ・腹部用ベルトをメインに、必要最小限の抑制にする。
  - ・抑制の完全解除を目指す。
- 効果
  - ・安全性を確保しながらも、患者の快適度が上がる。
  - ・寝返り調整ストラップを併用することで、寝返りも可能。
- 推奨状況
  - ・不穏な状態にならないことが前提で、患者の安全を確保するために抑制帯以外の代替手段がない場合。
  - ・患者のベッドからの転落など不慮の事故を防止する。

## ① 手部/脚部用ベルト（両手、両足）を外す。

患者の手首、足首のマジックテープ固定を解除し、再固定の必要がなければベッドに取り付けた手部/脚部用ベルトそのものを外します。

## ② ストラップを装着する（必要に応じて）。



(図1)

## 【ベッドからの転落を防ぎたい場合】

患者の左右両方にストラップ（#1C）を装着し、ベッドフレームの左右それぞれに留め付けます。このとき、どの位置の鳩目を使って留め付けるかは、患者にどの程度の寝返り幅を持たせるかで決定します。

## 【背中清拭やケガの手当など、片側を向かせたい場合】

患者の左右両方にストラップ（#1C）を装着し、ベッドフレームの左か右のどちらか片側（向かせたい方向）に2本とも留め付けます（図1）。



**患者が体を旋回させようとしたり、抜け出そうとする動きに十分にご注意ください。**

## 【旋回を繰り返したり、抜け出そうとすることで起こる危険性】

- ・腹部用ベルトが締め付けられて、腹部が圧迫される。
- ・旋回するうちに腹部用ベルトが胸郭方向へ押し上げられて胸部が圧迫される（股下ストラップを装着していない場合）。
- ・寝返り調整用に装着したストラップの間に足を差し入れるような、不穏な行動を取る危険性がある。

## 【旋回させようとする状態を回避するには】

ストラップを体幹の左右に装着することで、旋回を最小限に抑えることができます。また、足のどちらか一方に手部/脚部用ベルトを装着することで、足の動きが制限されて、旋回や不穏な行動を取りづらくなります。



## 【抜け出そうとする動きを回避するには】

股下ストラップを装着することで、腹部用ベルトの胸郭方向への押し上げを防ぐことができます。

## 【ベッドからの転落を回避するには】

両側のベッド柵を上げ、体幹部の左右にストラップを装着してください。



このほか、

- ・頻回な見守りと診療記録の作成などで、患者の状態を正しく把握する。
  - ・肺塞栓症など、抑制により起こる可能性のあるリスクを防ぐよう努める。
  - ・同一姿勢での長時間の抑制を避ける。
- このようなことにも留意してください。